

## 坪内逍遙における文学意識と

### 啓蒙意識の相剋

和田 繁 二 郎

逍遙の文学革新の運動は、「小説神髓」における写実主義の提唱にその中心がおかれている。そして、この写実主義が、近代文学の基本的な表現様式である点に、その意義を認めることができる。このことは、おおよそ定説になつているところであるが、この写実主義の提唱、「小説神髓」の執筆が、どのような欲求によつて行われたかがいま問題になるところである。

なるほど、「小説神髓」執筆の動機は、馬琴あたりの勸善懲惡的小説観にとらわれていた逍遙が、大学でのレポートに失敗し日本の戯作文学と、ヨーロッパ文学との相違に着目し、ヨーロッパ文学を研究することによつて得られた新知識を陳述しようとしたところにある。このように「小説神髓」の執筆動機は、全く研究的な立場に立つているが、それを公にしようというところには、また異なるものを見出さねばならない。というのは、その研究ができ上り、新しい文学はどうあらねばならぬかがわかると、彼は一人の先覚者たることを自覚した。そこで彼は、指導者として、その新しい知識を多くの人々に与え、かつその新しい文学の成長発展への期待を、時代

の動きの中へ持込まねばいられない気持になつたのである。つまり啓蒙の情熱につき動かされたのである。

彼の啓蒙活動は、政治思想の方面では、あまり積極的ではなかつた。彼は政治そのものにほとんど興味を持たなかつたが、ただ周囲に、政治に関心をもち運動に従う友人が多かつたために、それに引きずられる形をとつたにすぎないと言われる。それは事実であるが、政治に興味を持たないということは、すべての社会的な事象に興味をもたないということにはならないであろう。近代思想一般、あるいは風俗、人生等に関して、彼が並々ならぬ関心を持つていたことは、「妹と背かがみ」以後の諸作品を見ても明かである。

たとえば、「内地雜居未来の夢」に、紡績業で成功しようとしている主人公をめぐるストーリーの中で、殖産興業論の他に家族制度と個人の問題、恋愛と宗教の問題、その他演劇改良論や小説論にまで筆をはせている。やはり社会風俗一般の、新しいまた正しいと思はれる方向への啓蒙は、彼の大きな関心の的であつたと思はれる。こ



それは、やがて後日彼をして教育者たらしめる素地をなしたと言うことが出来るだろう。文学の革新、啓蒙を中心として、社会人生文化各方面への革新啓蒙の情熱が豊かであったことを確認しておかねばならない。

「小説神髓」の述作は、多くの人々を啓蒙し得たであろうとともに、彼自身にも、写実主義を深く信奉させることとなった。ここで、この写実主義への信奉と、彼の啓蒙の情熱とが、どのような関係にたつたということが問題になる。端的に言つて、この両者が両立し、あるいは融和し得るかどうかということである。

彼の写実主義理論によれば、小説は人情世態風俗のありのままの描写でなければならない。そして、その写実の結果、読者が自然に感動し、解釈し、反省し、あるいは楽しめばよいとする。ここに文学小説の勸懲から解き放たれたところの、いわゆる文学の自律性が主張される。したがつて、この写実の結果として予想される読者への反応のうち、反省し身を改め戒めるということは、もつとも意識されてはならない部類に属している。しかし、彼はこの道義上の効能について、写実のおのずからなる結果として説くだけでは満足できず「小説神髓」中に、裨益の項目を設けて説かねばならなかつた。このような配慮は、彼に啓蒙の情熱が激しかったということを示すものと言えよう。

写実さえ行つておればよいという、写実至上主義の成果に一理は認められるが、その写実の対象が、少くとも現在の対象を出ないものとすれば、彼の理想を盛り、今日を改変し、未来に何らかの実現を期待するということは、およそ困難なことであろう。今日只今の

写実は、この点から、彼が庶幾したような啓蒙とは、所詮相容れぬものとしなければならぬ。

この写実と啓蒙との矛盾は、いちはやく、彼の創作活動に、異なる二つの様相となつてあらわれた。それは、「当世書生氣質」と、「妹と背かがみ」である。前者は、いわゆる彼の写実主義の実験を試みたものであつた。つまり、多くの学生を登場させて、その人情風俗の写実を行つている。そこには、兄妹再会、親子対面というような戲作的な遇然性をもつたストーリーを備えてはいるが、勸懲の風もなく、一応写実主義の実践は行い得ていると言える。ところが、この「書生氣質」を刊行した明治十八年、そのおなじ年に、「妹と背かがみ」を刊行している。この作品は、夫婦の結合は如何にあるべきかを説いたもので、当時の男女交際の問題、男女同権の問題等をふまえて、啓蒙に資しようとしたものであつた。その内容は、教養のある女性と結婚しなければならぬと、母からも戒められ、みずからも戒めていた青年が、本能の命するところに従つて、かわいだけの無教養な女性と結婚してしまい、結果、不幸を招くというものである。これは後半にいささか戲作的なストーリーを設定しているが、大体人物の描写も写實的で、そのテーマも一通り表現し得ており、当時においては豊かな真实性を備えたものと言い得る。しかしながら、この真实性は、必ずしも写実より生まれたものではなく、後述のように全く別なところから生れ出たものと見なければならぬ。そうして、この作品のスタイルは、やはり啓蒙的な姿勢から生じたもので、「書生氣質」の写實的姿勢と対蹠的なものとなつているのである。



つぎに書かれた作品は、前述の「未来の夢」である。この作品は未完成の作である。その中絶の理由を、その当時彼自身発表しているが、その一項目に、「真の小説は現在若しくは過去を写すに止まるべし將來の事を小説に綴るは決して稗史家の真面目に非ずと悟つた為め」とある。この見解は、さらにその年、明治二十年六月の「未来記に類する小説」によつて、いつそう明確に語られた。そこで彼の説くところは、写実には、事柄の直接観察を必須とする、ところが未来を直接観察する手段はない、想像のみではとうてい優れた写実は行い得ない、したがつて未来小説は成立しないといふのである。未来を描こうとすることが、作者の願望を語り理想を語り、そのもとに読者の夢を啓らこうとするものであることは言うまでもない。この啓蒙の筆を折らしめたものは、彼の信奉する写実主義であつたのである。

こういう矛盾は、この後の、逍遙の創作活動を通じて、常に表面化せざるを得ず、彼の写実主義が一応の完成を示したと見られてゐる「細君」（明治二二・一八八九）においても、その、啓蒙の姿勢と、写実主義とが対立拮抗し、その作品を失敗に終らしめてゐる。この「細君」は、口には男女同権を云々する男が、細君を虐待し、いささかの落度を種にして離婚してしまふ悲劇を描いてゐる。そこに、家の制度の問題、男性の横暴、といつたことが、批判的否定的に語られてゐることは、一応うかがい得るのであるが、その細君の人物形象が、そのテーマを極めてあいまいなものにしてしまつてゐるのである。その細君というのは、言葉少なで、意地が悪そうな、無気味な陰気な、瘦ぎすす、顔はやつれ、色は青白く、額高く青す

じが浮いていて、目は凹み、眉も薄く、愛敬は徹塵もないという女性になつてゐる。学校へ通つてゐる頃から、負惜しみの強いのと、愛敬の乏しいのとで人に知られ、学問の外にとりえがない人と言われたという。読者はこのような女性にどのような印象、どのような感情を抱くであろう。おそらく好感は持てず、したがつて、この女性の悲境に対してさしたる同情をひかないのではないかと思う。もちろん、好ましくない女性でも、妻ともなれば、その人間性を尊重し、妻の座を安泰ならしめてゆくべきが、民主的な新しい倫理であると言えようが、このような薄気味の悪い女ならば、いじめられても仕方がないというような不埒な言を吐く輩も出て来ないとも限らない。ではどうして、このような好ましからぬ女性をヒロインとして設定したのであるうか。ここに他ならぬ彼の写実主義が作用してゐるのである。つまり、彼は、当時のインテリ女性のタイプを描いてみたのである。それもかなり極端なタイプを描いたもののである。このタイプは、すでに、「妹と背かがみ」に登場するインテリ娘「雪子」に見られる。彼女は主人公の勤務先の上役の娘で、主人公と相思の仲になりつつあるのであつたが、この雪子の冷たさが、もう一つ仲を深まらせないということになつてゐる。これは言わば、逍遙の好みからは、最も遠いところにあるタイプではなかつたかと思われる。このことは彼の結婚の体験からも推測されるところで、後に触れるところがある。

このように、当時のインテリ女性の好ましからざるタイプを写実し、しかもそれを読者の同情を引くべきヒロインとしようとした。そこでこの小説の男女同権の主張も男性横暴への抗議も、極めて不



透明なものとならざるを得なかつた。これはまさに、写実主義と啓蒙的態度との矛盾拮抗であつて、作家としての彼にとつては、極めて深刻な悲劇であつたと言わねばならない。この結果、彼は、小説に自信を喪失し、この後、再び本格的な小説には筆を執らなくなつてしまつたのである。

このような写実主義と啓蒙の情熱とが何故、矛盾拮抗しなければならなかつたのか。写実主義ははじめに述べたように、近代文学の基本的な条件である。啓蒙も近代をもたすために必要な文化活動である。ともに近代文化、文学の建設に、手を携えて寄与してしかるべきなのであるが、逍遙の場合、以上のような悲劇的な結末を見ねばならなくなつたのである。これは、逍遙個人の資質のしからしむところなのであろうか。

この問題は一つは、逍遙の責任であり、一つは時代の責任であると言ふべきものと思ふ。

時代の責任とは、外国文化輸入の様相一般がここにも見られるといふことである。主義と呼ばれ、思想と呼ばれるところのものが、現実の諸条件と関わりなく輸入され、さらに信奉されて、その主義、思想のために、現実の変革が要請される。そこに思想と現実とのギャップが生じ、思想運動家、政治家の苦悶を醸成せしめるのである。この逍遙の場合は、写実主義がオールマイティーとして学ばれ信奉され、現実の啓蒙家としての彼の意識と喰違ひを生じることとなつたのである。啓蒙家というものは、それ自体、新思想を体して、しばしば現実を遊離する傾きなしとしないが、逍遙の場合、そういう型の啓蒙家ではなかつた。かなり着実に現実に即して、是々

非々の批判をする程度に止まつた。そこにまた、真に新しいものを身につけることができず、二葉亭あたりに先を越されることにもなつたのであるが。

逍遙の責任は、やはりこの真に新しいものを身につけ得なかつたところにはじまる。「小説神髓」の中で、彼は勧善懲悪をしりぞけたが、その後新しい倫理を据えることをしなかつた。この新しい倫理こそは、民主主義の社会を築くべき中核をなすものであつたはずである。この新しい倫理を据えなかつたために、勧懲の内容をなす封建倫理の後の空白に、風俗、世態、人情がのさばつたのである。そして人情、世態、風俗の写実を手段とせず、それ自体完結した目的としたため、彼の一方の目的である啓蒙的情熱とそごするに至つたのである。前述のように、この啓蒙意識の内容は必ずしも古いものとすることはできないが、写実を駆使するには至らず、写実主義によつてすべてことたれりとする程、微弱なものであつたとも言ひ得るのである。やはり、彼においては、この写実主義を啓蒙の文学の中で駆使するまでには、現実生活と文学とが融一していなかつたのである。

しかし、この生活と文学との融一が、彼に於て、全くその兆候をも持たなかつたのではない。有力な可能性を彼は持つていたのである。それは他でもない、「妹と背かがみ」の真实性である。この作品は、写実の真实性のみならず、どこかに一派の真实性を見ることが出来る。それはまた啓蒙的情熱だけでもない。それは、彼の現実生活の苦しい体験がその根底に横たわつていたからである。

この「妹と背かがみ」を刊行中に、彼は、その頃親しくなつた、



根津遊廓の一遊女と同棲するに至つた。その女性は愛くるしい、またそういう環境には珍らしい純情な人であつた。しかし教養はなかつた。そういう女性と、彼は周囲の反対をおしきつて同棲した。そしてやがてまもなく正式に結婚した。この教養のない女性との結婚は、「妹と背かがみ」が悲劇をまねくものとして警告を發しているところである。にもかかわらず、このような結婚を敢えてしているところに、彼の決意と覚悟とは厳しかつたと言わねばなるまい。いわば背水の陣を敷いたわけである。このような切実な生活体験のなかで、自我を建設し、その自我に発して試みた虚構の眞実が、文学としての迫眞性をこの作品に与えたのである。その眞実は、そのまま近代文学への道をなすものであつたと言ひ得る。彼の文学者としての進路は、この「妹と背かがみ」にあつたのであるが、彼は、このはからずも成した成果をみずから評価することができず、この虚構の意義を追究發展せしめることがなかつたのである。ここにこそ彼の写実と啓蒙の一致、写実主義による新文学の誕生が見られるはずであつたのである。

当時の文壇においては、こういう条件はそう見出すことはできない。二葉亭の「浮雲」はこの範疇に入り、さらにそれを抜いたものであるが、この「浮雲」以前にはどうであつたか。当時の政治小説は、自由民権運動という大きな啓蒙運動の中で育かれたものである。この運動の性格には様々の不純なものを含みこみ、十分近代ブルジョア革命を達成することはできなかつたが、時代の新しい推移を促すエネルギーを藏していたことはいなめない。この現実の推移と行をとにした政治小説に、写実主義がどのような形で参劃し

ていたか。この設問は、この政治小説において写実主義が方法として駆使されていつたならば、写実主義は新しい文学主体にとつて得たい武器となり、新文学の建設に大きな役割を果し得たと予想されるからである。ところが政治小説における写実は、ようやく「雪中梅」「花間鶯」の著者、末広鉄腸によつて説かれていくにすぎない。「雪中梅」はその写実的成果のいささかあらわれた作であるが、またまた類型描写の域を出ない部分が多い。いわば、政治小説における写実主義は、まだ成果をあげたとは言ひ難いのであるが、そのまま時代の推移とともに、政治小説は衰退し、したがつて写実主義の成長の場も消滅してしまわねばならなかつた。時代はついに、写実主義を眞に近代的な使命において働かせることがなかつたのであつて、ただに逍遙のみを賣めることはできないであらう。

(注)

- 1 「回憶漫談」選集第十二卷三四五ページ
- 2 柳田泉「若き坪内逍遙」一一六ページ
- 3 拙稿「逍遙「妹と背かがみ」試論」立命館文学第一五二号  
(昭和三十三年一月号)
- 4 「貴重な新聞紙を借用して」読売新聞、明治二十年四月九日
- 5 拙稿「逍遙「細君」試論」論究日本文学第八号、昭和三十三年四月号
- 6 拙稿「逍遙「妹と背かがみ」試論」前掲
- 7 「花間鶯」中篇序文